

「建築プロムナード」「スキップゾーニング」「リレイティブデザイン」による開放感にあふれた新しい京都府総合資料館の提案です

リレイティブデザイン

京都は長い都市文化をもつ街です。庭と一体となった建築・借景を利用した空間構成・町屋群による通りの形成など、建築は単体で捉えられてきたのではなく、環境と一体となりながら新しい場所性を作っていく「複合した環境体」として捉えられてきたと考えられます。今回の計画においてもこのような都市文化を継承し、周辺に馴染むように建てることはもちろん、自然と建築・建築と人・人と人を結び合わせ、京都北山文化環境ゾーンにふさわしい「複合した環境体」とする新しい京都府総合資料館の提案です。



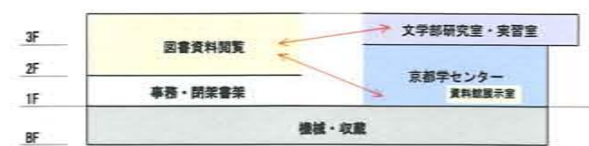
■歴史・文化の継承をデザインする

新しい総合資料館は歩けるまち京都を表象する、低く伸びやかな水平のシンボルとなります。屋根の下に様々な活動が展開してきた日本建築のように、大屋根を連想させる3階のボリュームの下には世界中から訪れる研究者や府民の活動がひろがります。木の文化、石の文化を継承した素材によって京都の伝統を未来へ繋いでいきます。



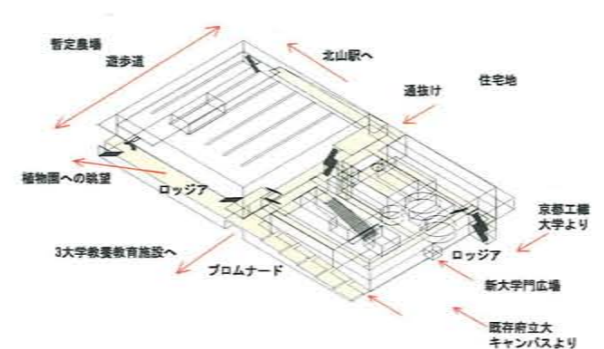
■各ゾーン間の連携をデザインする

各部門の独立性を保つ単純明快なゾーニングながら、階段状に各部門が繋がる、複合施設のメリットを活かした「スキップゾーニング」とします。各部門での活動が身近に感じられ、様々な連携を生んでいく端緒となります。



■文化と人、人と人の出会いをデザインする

「歩いてまわりたくなる街」北山文化環境ゾーンの中ほどに位置し大きな面積を占める本計画は各方面からのアクセス動線を建築内に引込み、立体的な建築プロムナードとして建築内を周遊できる計画とします。開放的な空間をめぐるながら文化に触れ、様々な交流・休息をうむ場所をつくっていきます。



■建築と人を繋ぐ光をデザインする

建築と人の結びつきは光を媒介にされてきました。光によって場所の性格が明らかになり、それに促された人の活動が生まれます。今計画においても様々な光の状態をつくり、建築と人の結びつきをつくります。

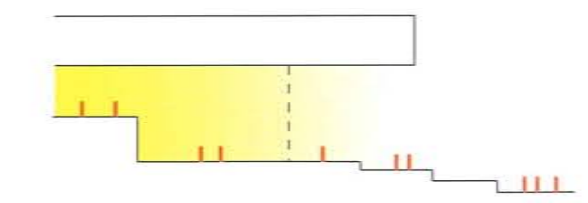
- ・エントランス：公開講座ホールやセミナー室などのボックス状構造の壁面に照らすトップライトを設け、外部から人を引込むとともに、陰影のある光環境をつくります。
- ・図書：ハイサイドからの光を構造材である寄せ格子に反射・拡散させ間接光に変換し読書に適した、柔らかい木漏れ日のような環境をつくります。
- ・文学部ゾーン：通り庭のスケールのニワでは直達光と壁面の反射光により思いがけない明るさの濃淡がうまれます。



■内部と外部の交流をデザインする

各階に異なる性格を持った外部空間を配置し、どこにいても外部空間が近く、内外が一体となった親自然の建築とします。

- ・エントランスと新大学門広場を繋ぎ、広場が入り込んでくるような1階ロジア
- ・閲覧室の休憩所ともなる、プロムナード・植物園を見晴らす2階ロジア
- ・研究諸室の間に張り巡らされた、人を奥へと導き、潤いや休息をもたらす3階ニワ



■周辺環境との関係をデザインする

■本計画の広域的な位置づけ
敷地は京都市街地の北部に位置し、歴史資産・自然資産・文化資産の集積が見られる地域にあります。歩いてまわりたくなる街、北山文化環境ゾーンの中心施設として開放的で多くの府民が訪れることができる居場所を多くつくります。

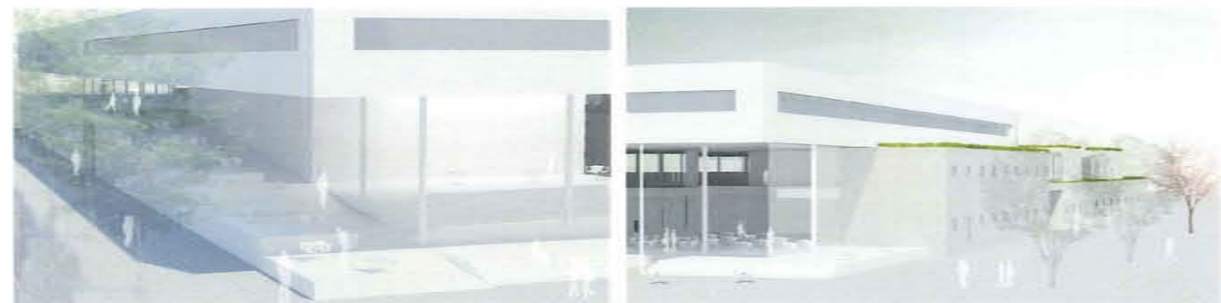
■東西南北と異なる関係に対して周辺環境と一体となった場所をつくります。

南「新大学門広場」:
広場のスケールに合わせた大きな底下空間と2層吹き抜けのエントランス

西「プロムナード」:
プロムナードとの立体的な関係を生む段々状テラスとロτζア

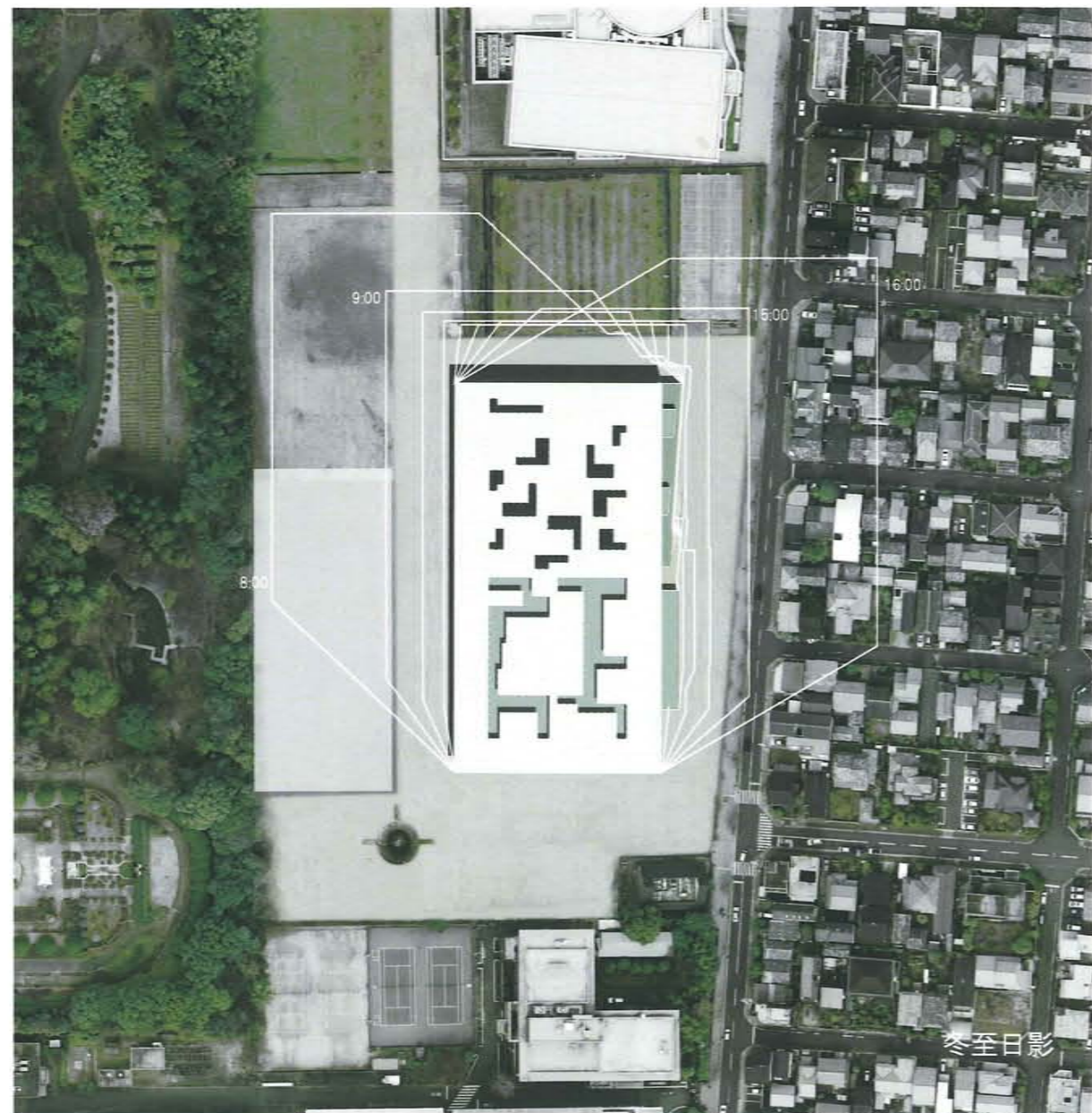
東「住宅地」:
ボリュームを分節し、柔らかい表情をつくる植栽。住宅地を見下ろす関係にならないよう視線制御された図書メザニンの堅格子

北「暫定農場」:
建物北に空地をとり遊歩道・駐車場・車路とするとともに、できるだけ低く抑えられた建物高さ

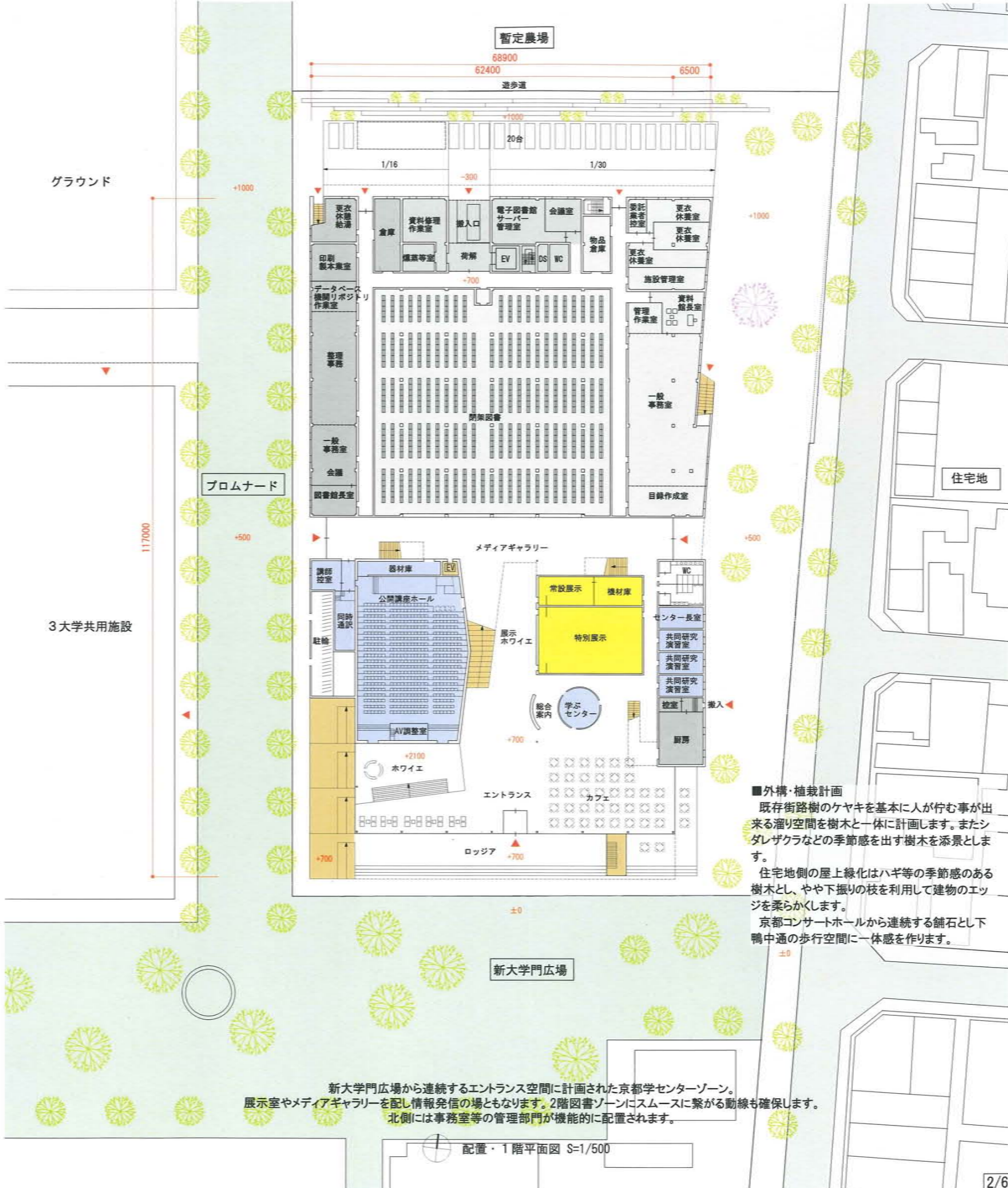


■ロτζアまわり

■住宅地側のファサード



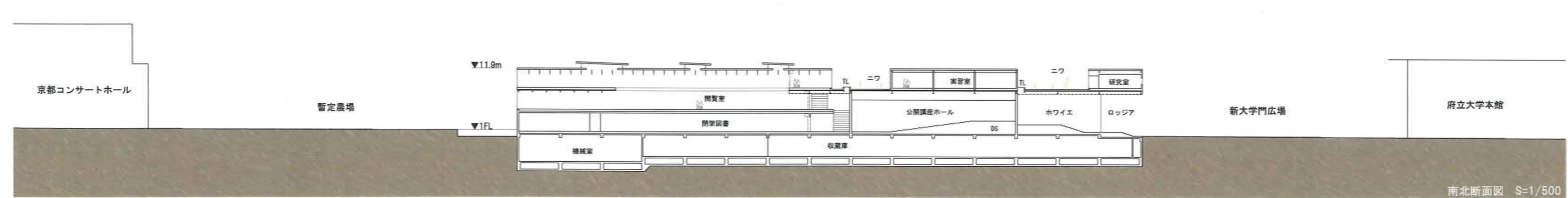
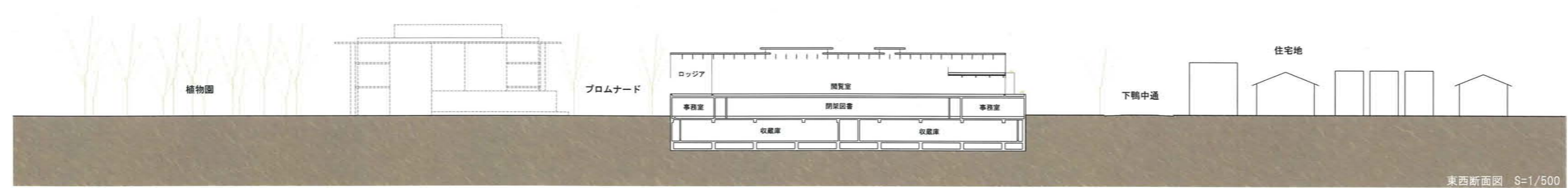
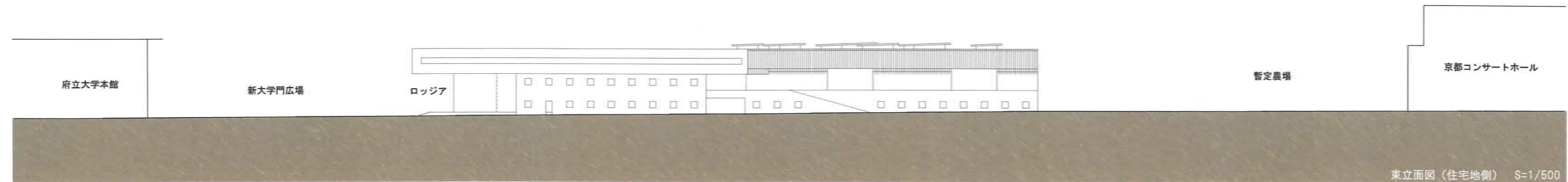
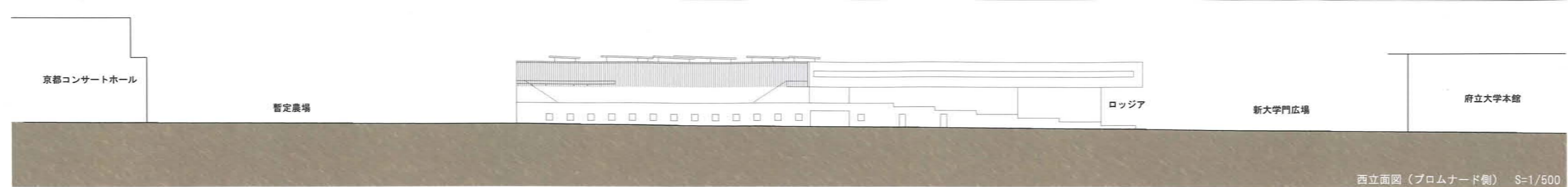
冬至日影



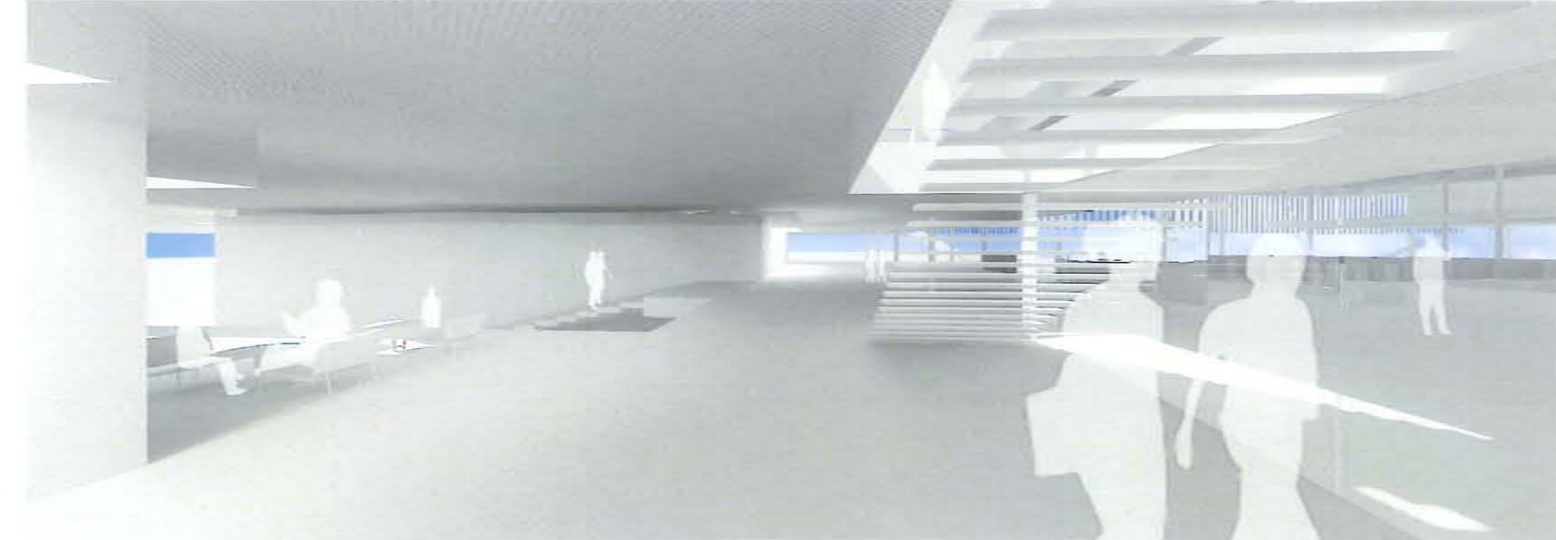
■外構・植栽計画
既存街路樹のケヤキを基本に人が竹む事が出来る溜り空間を樹木と一体に計画します。またシダザクラなどの季節感を出す樹木を添景とします。
住宅地側の屋上緑化はハギ等の季節感のある樹木とし、やや下振りの枝を利用して建物のエッジを柔らかくします。
京都コンサートホールから連続する舗石とし下鴨中通の歩行空間に一体感を作ります。

新大学門広場から連続するエントランス空間に計画された京都学センターゾーン。展示室やメディアギャラリーを配し情報発信の場ともなります。2階図書ゾーンにスムーズに繋がる動線も確保します。北側には事務室等の管理部門が機能的に配置されます。

配置・1階平面図 S=1/500



■2階ミキシングバス 京都学センターゾーンと図書ゾーンをつなぐ



■3階ミキシングバス 図書ゾーンと文学部ゾーンをつなぐ



■長期の使用に耐える持続可能な建築

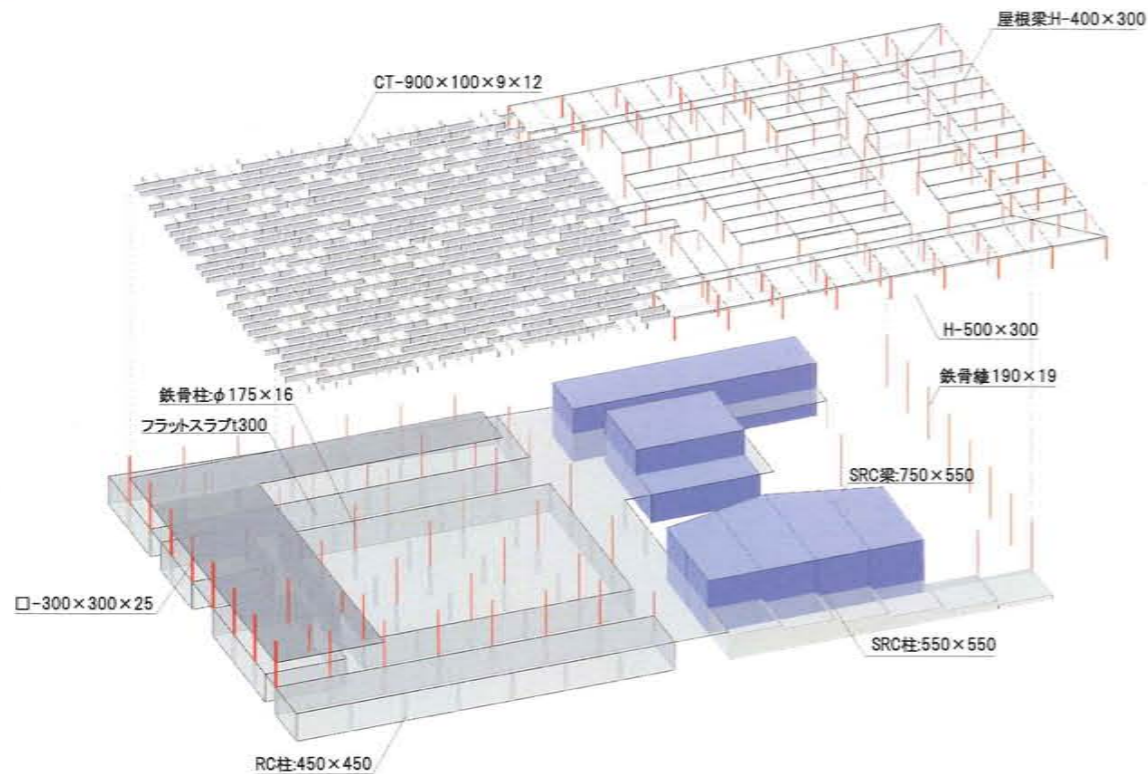
■再生可能な素材の利用

木材や石材などの再生可能性の高い素材を積極的に利用し、耐久性・コストの許す範囲で京都府産材の採用を検討します。

■フレキシビリティの確保

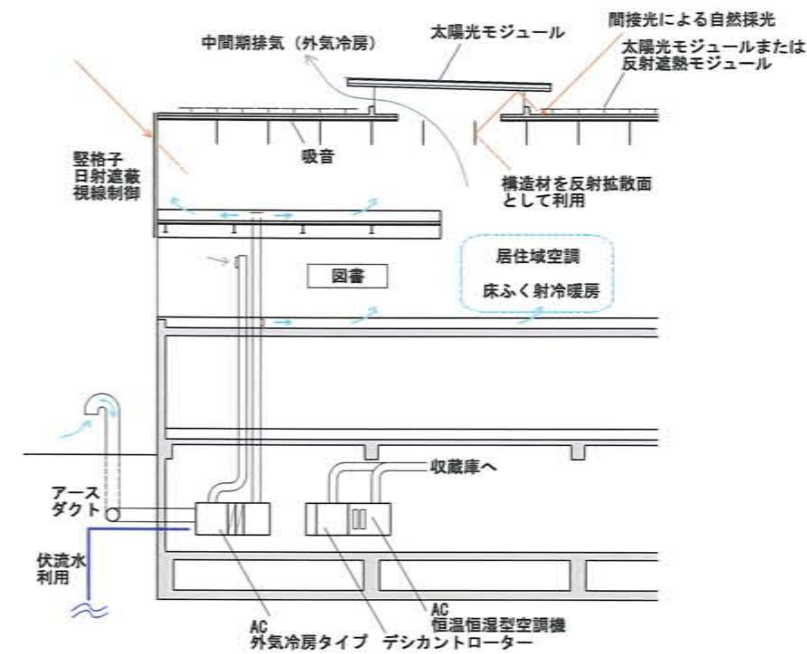
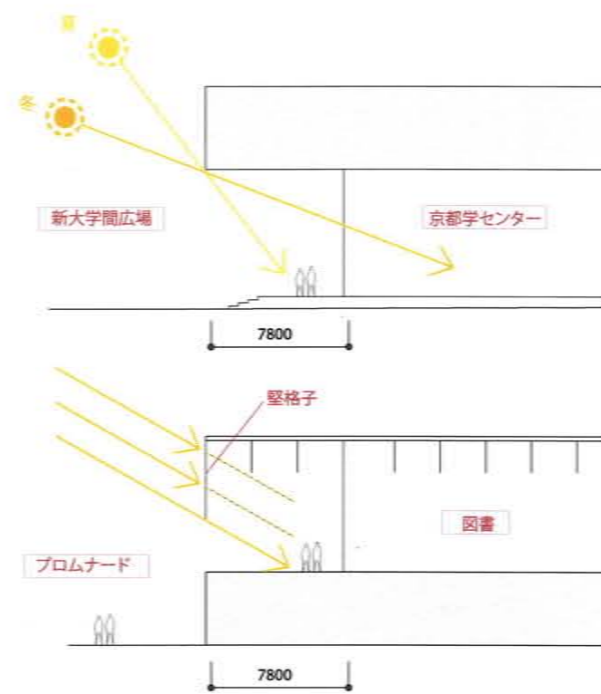
床フトコロを確保することで高い天井高さの空間の置換空調を可能とするとともに、給排水設備の増設なども可能な計画とします。閲覧・開架の図書ゾーンはワンルーム的な大きな空間とし家具等のレイアウト変更に対応できます。各室の間仕切り壁はできるだけ乾式工法を採用し、将来の模様替えにも対応できる計画とします。

■各ゾーンの空間特性に応じた構造形式とそれらを繋ぎ合わせた構造計画



■設備に頼るだけでなく建築的な工夫による「環境の街京都」にふさわしい環境計画

- ・ 建築の南面西面にはおおきなボリュームを張り出し訪れる人に快適な半外部空間を提供するとともに、日射による空調負荷を大きく減らし環境にやさしい空間をつくります。
- ・ 収蔵庫は安全面の対策をしながら外気の影響を受けにくい地下及び1階の外気に直接面さない部分に設置します。1階は一部見える収蔵庫とすることで多くの資料を有する資料館であることを訪れる人にアピールし京都に対する新しい好奇心が芽生える場とします。



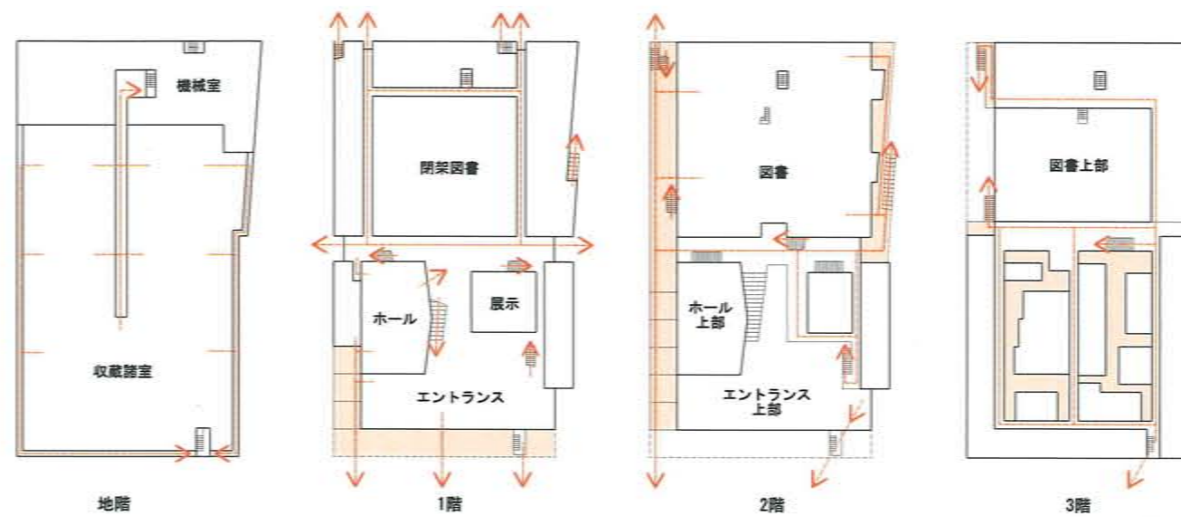
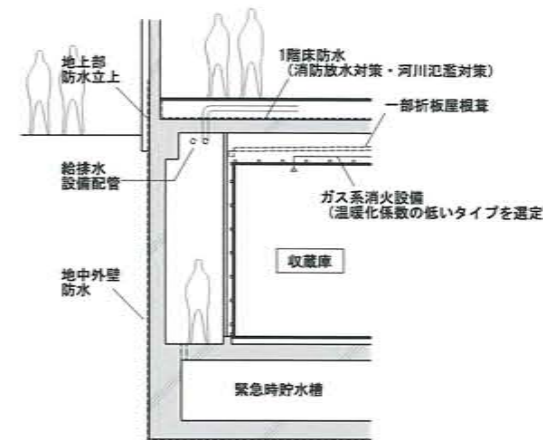
■自然エネルギーを利用した省エネルギーな空調換気システム

- ・ 自然採光換気の積極的利用・雨水中水利用・アースダクトによる外気の導入・伏流水によるヒートポンプ空調・デシカントの導入により消費エネルギー削減をはかります。
- ・ 建築の遮熱・断熱性能をあげるとともに、部位に適した遮熱・断熱ガラスを採用します。

■防災・安全計画

- 地階の収蔵庫においては外気の変動の少ない安定した環境であるメリットを活かしながら、災害時に備え様々な対策を行います。
- ・ 人の通行が可能な二重壁構造とし日常的な点検スペースとして利用し、災害時は職員の避難経路とします。
 - ・ 地中外壁・耐圧版及び室内1階床スラブに防水層をつくります。
 - ・ 給排水管の天井スラブ下での引き回しをしない計画とし、万が一の漏水に備え一部に折板による天井を設けます。
 - ・ 自家発電装置により停電時においても揚水ポンプの稼働を可能とします。

東北震災の被害を調査し、天井や外壁などの二次部材や家具書架等の安全対策を行います。



- ・ 隣の空間が見えていることで利用者が建物のどこにいるかが把握しやすい計画です。避難経路を複数確保し、室内から直接外部に出られる避難経路をつくるなど、スムーズに迅速な避難が可能な計画とします。

本建物は、117m×62.4mの平面形状からなる地下1階、地上3階建の多様な用途を有する建築物で、地階・1階・2階を鉄筋コンクリート造とし、3階（一部、2階）を鉄骨造として計画します。積載荷重が大きく、燃え代の多い諸室の主体構造は、耐震性および耐火性を考慮して、RC造（一部、SRC造）としています。地下階の構造は、基本的にRC造による一体構造とし、主に外周の剛強な地下壁で地震力を処理しています。基礎は、砂礫混じりの粘性土層(N値25以上)を地耐力200kN/m²とする支持地盤として、二重ピット形式の直接基礎とします。また、2階床スラブについては、梁を設けずフラットスラブ構造にすることで、1階の有効階高の確保と自由な平面計画を可能にしています。

1) 地階の「収蔵ゾーン」と1階北側の「閉架図書・サービスゾーン」については、7.8mの均等グリッドによるRC造の耐震壁付きラーメンで構成されており、収蔵およびサービスを効率的に行える合理的な構造計画としています。

2) 1階南側の「京都学習センターゾーン」は、大多数の人が集い、様々な交流や活動をするを前提としている為、2層吹き抜けのエントランスやホール等の大空間エリアとしています。ここにRC造（一部、SRC造）によるボックス状の耐震壁ラーメン構造体を配置する事で、水平力を無理なく負担できる安定した構造形式にするると同時に、ファサードには鉛直力のみ負担する鉄骨ポスト柱だけの開放的な空間が実現可能となります。

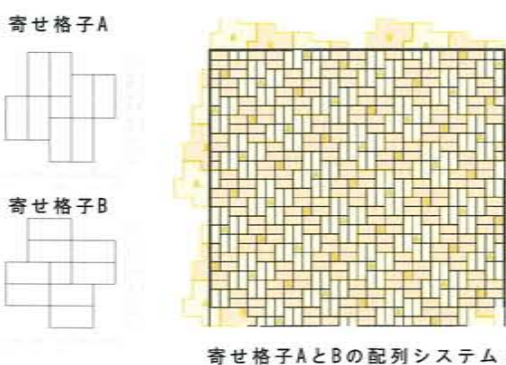
3) 2階・3階北側の「図書ゾーン」の屋根は、CT-900×100×9×12による「寄せ格子」構造としています。十分な梁せいを確保した格子屋根は、無理なく大スパンが可能となり、2層吹き抜けの室内で175φ×16の小径鉄骨ポスト柱をランダムに適切配置し、北側外壁を純ラーメン構造にする事で耐震性も確保しています。

4) 3階南側の「文学部ゾーン」は、外周および内部に研究室や演習室等の諸室が分散配置され、その隙間に通路やニワ等の共有スペースが配置されています。建物外周にある諸室の界壁内に鉄骨プレスを配した二層一体の架構システムは、7.8mの片持ちに対しても、無理のない合理的な構造システムとなっています。

以上の構造形式を、適切に重ね繋ぎ合わせることで、さまざまゾーニングで構成される複合建築体に対して、多様性と一体感のある構造計画としています。

■『寄せ格子構造』

「図書ゾーン」屋根は、梁架構を渦巻き状に非連続とする文節的な構造システムです。寄せ格子構造は、直線架構の場合に生じる応力集中を避ける文節的な力学システムであると同時に、軽快で簡易な合理的架構システムとなっています。部材節点は、ピンジョイントを基本とする為、施工性も高く、H=900のせいを有する鉄骨梁は、鉄骨量も少ない軽快な鉄骨表現が可能です。屋根からの自然光を反射・拡散する役割もはたし、伝統建築にならった構造と意匠が一体となったシステムです。



- ・ 建設区域北側の車路はプロムナード側に緊急車両の通り抜けが可能な構造とし、総合資料館と3大学教養教育施設に対する消防車救急車等の緊急車両の寄り付きが可能な計画とします

